

第3回 横浜市京浜臨海部再編整備マスタープラン改定審議会 議事録		
日 時	平成29年10月13日(金) 午後15時00分～17時00分	
開催場所	市庁舎5階 関係機関執務室	
出席者 及び 欠席者	委 員 (定数12人) (定足数7人)	出席者12人【成立】 池田龍彦、井上聰史、岩佐朋子、小此木歌藏、岸井隆幸、小西健一郎、佐土原聡、藤倉まなみ、二村真理子、真野博司、森地茂、村木美貴(敬称略)
	欠席者	なし
	事務局	薬師寺都市整備局長、小池都市整備局企画部長、堀田都市整備局企画課長、林経済局長、三枝経済局成長戦略推進部長、桐原経済局産業立地調整課長、中野港湾局副局長
開催形態	公開(傍聴者1人)	
議 題	1 京浜臨海部再編整備マスタープランの改定について 2 その他	
決定事項	なし	
議 事	(事務局)	委員全員の出席があるため会議が成立していることの報告 傍聴者数が1人であることの報告 配付資料の確認及び審議会の概要の説明等
	議題1 京浜臨海部再編整備マスタープランの改定について(発言要旨)	
	(事務局) (森地会長)	(京浜臨海部再編整備マスタープラン改定について資料説明) 今までやっていたことと同じ事が書いてあることは黄色、今までやっていたことを少しだけ伸ばす、改善することは緑、全く新しいアイデアが入っていることは赤で書いてみていただきたい。国土形成計画の時もそうやってみたら、全く今までと同じ事を書いてばかりいたので、各省庁に持ち帰りを指示して、新しいことがやっと少し増えてきた。今までと同じ事を書いていても、誰も読みもしないし、興味も引かない。まして、誘導能力などない。ぜひよろしくお願ひしたい。 冒頭、人口が減るからもうダメだと言わんばかりの話なのだが、国立社会保障・人口問題研究所の首都圏の予測は25年間ずっと間違い続けている。今回、2010年の予測を出しているのだが、15年の国勢調査から遙かに上回っていて、東京都は予測をし直して、2045年までだったか、今までの人口は維持されると置き換えた。横浜は減ると言っているが、2015年で減っていない。人口問題研究所を信じると書いていて、スタートが間違っている気がする。 (小此木委員) 目指すべき方向性はよくまとめていただいているし、これをやっていただければ、非常に素晴らしいことだと思うが、これを全て実行するのは非常に大変だということが第一印象。 物流の方から言うと、例えば、今、横浜港に入ってくるコンテナ貨物は、約

議 事

8割から8割5分ほどは、横浜港の近くでコンテナを開けることなく、そのまま内陸に向かってしまい、そして内陸の方でコンテナを開けて、そこから周辺地域、あるいは首都圏に配送されていくという輸送形態になっている。横浜港頭地区の倉庫業としては、横浜港に入ってきたコンテナ貨物は当地区開梱して、そこから配送していくということが望ましい。横浜港の物流発展のためこれまで横浜環状北線などの道路網の整備を要望してきたところで、事業が進んできたのは良いことだが、その一方で、横浜港に入ってきたコンテナ貨物がそのまま内陸の方に行ってしまう状況を生む要因にもなっている。これに対応するには、ここで作業をする人たちの交通環境等を整えるということが必要。もう一つは、横浜港頭地区から共同配送をしていくこと、ここに横浜港頭地区の物流業の活路がある。横浜港頭地区に入ってきた倉庫は首都圏向けとか、全国向けの貨物がたくさんある。ご承知のようにドライバー不足なので、一台のトラックに積む積載効率を高めて、内陸、首都圏、あるいは全国に向けて配送していくというものが、非常に将来性のある仕事になっていくと思われるが、そのために必要となる集積拠点といった部分は儲けにならない。例えば、10個の倉庫があるとして、同じ埼玉の方に運ぶ貨物があると、一台10トンの車に、10の倉庫から1トンずつ集積拠点に運び、そこから埼玉に運ぶということになるが、その集積拠点に運ぶ輸送と使用料は儲けにならない。ここが非常に痛いところなのだが、では、なぜ内陸の方に物流拠点がどんどんできるかというと、それはやはり向こうの土地が安いから。また、向こうに人口の集積があり、そういうところで働くパートの人たちも比較的集めやすい状況にあるということ。これを解決できれば、横浜港頭地区で、コンテナを開けて、そこから配送できるというようなルートをつくる将来性が私はあると思うし、この点にしか、近い将来も遠い将来も含めて、横浜港頭地区の倉庫業が生き伸びる活路はないのではないかと私は懸念している。その辺の管理をどういうルート等を開発していくかということ、港湾局も含めて、ぜひお願いしたいと思う。

(井上委員)

いわゆる共同配送のためのクロスドックのターミナルをどう作っていくかということだと思う。世界の主要港湾が、素通り化していくということに対して、地元の経済を支える物流基地としての港湾づくりをどのように行うかという点で、この15年ほどの間に戦略はずいぶん転換してきている。そういう意味では横浜に限らないが、日本の主要港湾はほとんどといって良いくらい、手を付けていない。小此木委員の指摘は非常に大事な点だと思う。

先日視察した大黒ふ頭の自動車のターミナル、いわゆるオートターミナルだが、都心の前面であれだけの大量の自動車を扱っているというのは、世界におそらくないのではないか。良いという意味で言っているわけではなく、その逆で、極めて低利用な土地利用状況である。需要に力強く応えることは大事だが、一方で非常に限りがあるスペースであるし、港湾ロジスティックスを展開する場所もそうそうたくさんあるわけではないので、大黒ふ頭の土地

議 事

利用の高度化は避けて通れないのではないかと。

今日の産業の長期的な方向性を考えていくことはもちろん大事だが、同時に産業空間の将来ビジョンというものが、極めて大事だと思う。どうもそれが今日の議論の中からは浮かんでこない。先日、視察をした時の私なりの印象は、どの地区も雑然としている。言葉としては、研究機能を強化する、技術開発拠点にする、グローバルなセンターにしていく、あるいはマザー工場の機能をもっと強化すると言うが、あそこを訪れた海外の人や市民はそういうイメージを汲み取るだろうか。自分はここで働き、研究をしていきたいと思うようにはなっていない。二次産業が集積したゾーンではあるが、人がもっと前面に出るような産業エリアのイメージが極めて大事だ。囲い込まれた堀の中の工場で、土地利用を高度化し、機能がグローバル化しているということ、単に寄せ集めただけのゾーンというのは止めるべきなのではないか。そういうことから言うと、賑わいという視点も、企業が工場をオープンにして、一般市民の人を呼ぶのももちろん悪くはないが、このゾーンの本質から言うと、産業活動を基盤にして、日本各地から、あるいは世界各地からも研究者、開発者が集まり、知恵を交わすゾーンというイメージにすべきなのではないか。

それぞれの企業が頑張っている土地利用の変化というものに対して、何かできないか。今日も「適切な誘導を図る」という表現がたくさん出てきたが、ここは臨海部なので、一つは津波対策を含めた防災事業というようなものをテコにしながら、各企業の土地利用を串刺しにして転換を図っていくということは大いにあり得るのではないかと。そして、かつての運河、もっと言えば鶴見川もそうだと思うが、大きな船が入っていくという時代ではもうないというふうに思うので、むしろあの地区で働く人たちが過ごす空間として、もう一度防災機能強化と併せてウォーターフロントをきちんと作り直していく。場合によっては対岸に渡る人道橋のようなものをきれいにデザインしていく。内陸のマスタープランを検討しているのではなく、海沿いの産業ゾーンの将来像を議論するわけなので、このエリアにはもっと潮っ気がたっぷりあって良いと思う。MM21に色々な機能があるから近くて良いだろうと言うが、あそこにどうやって行くのか。例えば、水上タクシーといったものがもっと頻繁に使われるような環境を考えるのも悪くないだろうし、各水運なり、それぞれの地区の空間軸から、本当に横浜港のシンボルになるような、あの3つの橋梁のどれかがせめて見えるような、ビスタが確保されるとか、もう少し人が集まって、世界を引っ張っていくイノベーションセンターとしての産業ゾーンの空間イメージというものをもう少し力強く描く必要があるのではないかと。

(池田委員)

港湾機能そのものは、本牧・南本牧にメインは移っているが、その背後としては、空き地が相当出ているなど、まだ非常に大きなポテンシャルを持っている地域があると思う。今回、産業の状況について非常に細かく、丁寧に分

析されていると思うが、それらがどういうふうにして連携するかを考えるべき。空き地もあるし、非常に蓄積もある。ただ、非常に古くなって、錆びているようなところも結構あるので、小西委員が会長をされている活性化協議会などの中で、お互いが協力して、ここら辺をちゃんと使っていこうかという話ができれば。そして、新しく来る研究施設、あるいはその人たち、周辺の人々の連携は全体の力になっていく。普段のお付き合いから、ここをどうしていくかという意志が全体の力になる。そういうものは、一つはソーシャルキャピタルみたいな形になるのではないかと思う。そういうことを実現するためには、やはり色々な便利なアクセス等、色々な施策を実行していく、あるいは、プランしていくということが必要なのではないかと思う。マスタープランはハードの絵をつくるだけではなく、ソフトもぜひこの中に入れ込んでいっていただければと思う。

(小西委員) 活性化協議会の会長をしているので、今の池田委員の発言はよく分かる。先程説明があった通り、いわゆる産業構造というものが変化している。その中でそれをどう整理してマスタープランをつくっていくかということだが、どういう方向を目指すとしても、現状、規制が非常に多いので、いかにして、うまい仕組みをつくっていくか、規制を外していくかということが肝要だと思う。井上委員が言われたように、ここの地の利を考えれば、日本や世界の研究者がここに来て働きたいというような場所も作っていくべきだ。ゾーニングを考えるにあたっては、現状の事業を継続していくゾーン、物流機能を促進するゾーン、新産業といったものを誘致するゾーン等があると思うが、例えば、この地域の全体またはある部分を戦略特区に指定して、そこでこれまでの規制を外して、新しい都市づくり等を考えていくような考えが必要だ。

(岸井委員) 今日は各エレメントの状況を分析していただいたが、これをどういうふうな軸でまとめていってマスタープランにするのか、マスタープランは何の意味をもつのか、ということが問われているのだと思う。戦略的にこの地域を、横浜市にとって、あるいは日本にとって、意味あるものにしていくためにということが大きな大義だとしても、そこに至るプロセスを今あるいくつかのエレメントがそれぞれに違う世界で動いている中で、何か一つでも、二つでも、軸になるものをいかに発見できるかどうか。ひょっとしたらそれはすごく魅力的な空間をここに創り出すことかもしれないし、あるいは企業間のシステムの連携をもっと図るようなことをもっと面的にやろうではないかということかもしれない。共通に考えるべきことは何なのかということ、ここから探し出す作業が次の段階になると思う。

(佐土原委員) 環境や防災に関連して、先程の環境エネルギーのところ、京浜臨海部の企業連携、エネルギー技術の話があったが、電力の自由化も進んできて、分散電源がこれから入ってくると、そういうものを上手く活かして、融通しながら全体の効率性を上げていくと共に、災害の時にこのエリアは非常に大事な役割を果たすので、ライフラインとしてのエネルギーもしっかり確保する、

そういった先程から「連携」というキーワードが出ているが、その具体的な一つの姿として、そういうことをしっかり描いて、方向付けをしていくことが大事なのではないかと思う。

もう一つは、環境に関してであるが、「緑」という言葉で今、表現されていたり、あるいは生態系という形になっているが、それをどう取り戻すかという話がある。この海のあるエリアは非常に豊かな生態系で自然の力があり、海自体が非常に大事な資源でもある。それらを内陸と繋いでいくという非常に大事な場所になるので、その「緑」を中心として自然を回復しながらこのエリアの質を高めていく。あるいはこれから気候が変わってくる中で、夏は非常に暑くなり大変だが、中間的な季節では快適な季節が出てくるなど、年間を通してこのエリアをどのようにより質の高い良い空間にしていくかという中で、この「緑」あるいは自然の力をどう活かしていくかという観点から環境を考えていくことも重要ではないかと思う。

(藤倉委員) 環境エネルギーについて。説明資料の7ページでは、環境エネルギー分野が京浜臨海部における戦略の大きなものとして位置づけられているが、これが15ページ以降になると、産業としての拠点とは少し違う視点になっており、一貫した軸がない印象に見える。さらに、今日の説明資料と、最初に一枚紙で配られたものがあまり整合が取れていない。一枚紙で配られた方の、環境エネルギーの取り組みのミクロな視点のところには、太陽光発電設備の立地や燃料電池フォークリフトの水槽実験などを書いてあるが、例えば、この太陽光発電設備の立地について、説明資料の方には全く出てこないの、どういうイメージで考えられているのかがまだ整理しきれていないという感じがする。特に太陽光は、更地に置くのは一番もったいない土地の活用法なので、どういうイメージをもっているのか。それから、このように発電施設そのものを置くことと、先程の研究拠点として整備することがどうリンクするのか分かりにくいという印象を持った。

それから、前回、土壤汚染のことを申し上げて、この一枚紙には、たくさん書いていただいたのだが、説明資料には全く出てきていないので、例えば土地の質といったような観点で、どのように扱うかについても、今後の検討の中には入れていただければと思う。

表現の仕方について、例えば、説明資料の2ページを見た時に、将来ビジョン検討の主な視点が右下の四角にあるのだが、(6)に「先進地域であるというイメージを培うため国際的な関係意識の高まりや最大の対策を強化する」とあるが、イメージのためにやるというのは、あまり適当な表現ではないと思う。

(二村委員) 環境エネルギーについてまずは感想だが、随分、再生可能エネルギーに寄った政策なのかなという感触を受けた。先ほど藤倉委員も言われていたが、例えば、太陽光パネルもどちらかというと、利用可能性が低い土地に対してそういうものを置くというのは多々聞くが、これだけ逼迫している土地をどう

やっとうまく使っていこうかと考えている時に、太陽光はないのではないかと。洋上発電ならまだ分かるが、少し気になった。

それから、物流について、先程小此木委員からも話があったが、共同配送は確かに活路の一つのような気がした。そういうような手法を使ってロジスティクスを強化していくためには、周辺道路の一部を重量車両が通れるようにする等の規制緩和も必要だと感じた。

それから各産業を拝見していると、維持するという表現と、誘導するという表現があり、特に物流のところは、誘導するという表現が多かったように思える。ここを物流の拠点として高めていくのだが、あまり方々に散ってもらっては困るという方針はよく分かった。そこで誘導するための手段をどうするのか、どういう手法を使っていくのかというのは、やはり重要なポイントなのではないかと思っている。いかにインセンティブ、要は規制を掛けるのか、もしくはそこを極めて魅力的なところにするのかというような、何か手段を用いないといけないだろう。例えば、横浜市としてこういう計画を立てているので皆さん従って下さいと言うのでは、なかなかこちらの意図を汲んでくれる企業はない。最近の物流事業者で、特に新規参入組にはアジアの企業や、業種外の建築メーカーの方たちも入って来ている。そういった時に、こちらの意図をどこまで汲んでくれるのかといっても、それは無理だと思う。なので、何かきちんとした方向性を示し、その次に手段を講じていかないと思うようには進まないと思う。

(真野委員) 産業の観点から意見を申し上げたい。第1回の会合で発言したことの繰り返しになるが、京浜臨海部再生への道は、ここをイノベーション・ホット・スポット・コーストにすることである。絶え間なくイノベーションを起こす、そのために多様な産業、人材の集積からなるクラスターを形成していくことである。

企業の将来展望を調べ、今まで配布された資料を読み、現地調査した結果、京浜臨海部はその可能性が極めて高いことを改めて感じた。尤も、それは既に国際戦略総合特区で進展中のことでもある。特区は2021年度末まで期限が延長されたこともあり、目標達成に向け突き進んで行って欲しい。そのためには、既存企業は構造転換を急ぎ、市は新規企業の導入の基盤整備に注力していただきたい。

それから、井上委員からご指摘のあった、産業空間のビジョンについては、全く同感である。臨海工業地帯だからといって、何も殺風景である必要は全くない。

イノベーション・ホット・スポットは、頭脳と資本と人材が交わる拠点である。人材が集い、交流し合い、刺激し合うことがイノベーションを起こすことに繋がる。そのためには、それに相応しい、美しい賑わいのある空間が必要である。

私は以前、デベロッパーから浜名湖畔の開発計画策定の委託を受けたことが

ある。その時、提案した計画は、浜名湖のリゾート機能を活用して、ここに世界から研究者、学者が集い、学会、ワークショップを何時でも開催できるリサーチ機能を整備し、イノベーションに係る情報を世界に発信するリサーチ・アンド・リゾートの開発、つまり世界の頭脳が遊泳する空間を整備しようというものである。

これは残念ながらバブル崩壊の影響を受け、デベロッパーが引かざるを得ない状態になり、志半ばで空中分解してしまっただが、頭脳立地法に基づく、浜名湖国際頭脳センターが設立されたことが救いであった。

アメリカのシリコンバレー、ボカラトン、フランスのソフィア・アンティ・ポリスなどはリサーチ・アンド・リゾートのそのものである。

また、京浜臨海部再生を考える時、「海の効用」という視点で、過去、現在の状態を整理し、将来の在り方を検討することが望ましいと思う。

これもだいぶ古い話だが、私は大規模工業基地の構想が打ち出された時、苫小牧東部、むつ小川原、秋田湾、志布志湾を対象に大規模工業モデルコンビナート案をつくった。

このうち、志布志湾は県の第一次計画案が約17km続く白砂青松の地先を全面埋立するものであったため、地元から猛烈な反対を受け、頓挫しかかっていた時、県の方が打開策の相談に来られたことがある。

その時に使ったのが海の効用という言葉であり、獲る海、見る海、遊ぶ海を実現するとの観点から計画を変更するべきであると申し上げた。獲る海は生産する海、見る海は白砂青松が続く海、遊ぶ海は遊泳が困難な海を遊泳できる海にするという意味である。このキーワードをもとに、全面埋立を止め、真ん中の海域を開発のシンボルゾーンとして、そのまま残すことを提案した。これをもとに県は第二次計画案を策定し、地元の了解も得られたので、開発を実施した。現在のところ計画の大半を実現している。

海の効用については最近、収穫の海、観光の海、交流の海と表現を変えているが、こういう観点から京浜臨海部の過去、現在、未来を整理してみると、面白い結果が出るのではなかろうか。

それから遊休地の問題であるが、遊休地を持つ既存企業におかれては、旭硝子がユーグレナに用地を賃貸したようなことを是非とも積極的に実施していただきたい。

ご存じだと思うが、北九州市が平成24年度から「企業内公共産業団地モデル事業」制度を実施している。対象は三菱ケミカルの黒崎事業所の遊休地であり、市はここへの企業誘致活動にも注力しており、三菱も独自に企業誘致活動を進めている。

また、これとは別に新日鐵住金は八幡製鐵所の閉鎖した一部の工場棟に地元企業など数社を誘致しており、旭硝子も戸畑の北九州事業所の遊休地への企業誘致活動を進めている。

何れも賃貸であるが、共通する最大のセールスポイントは既存のインフラを

使えることで、三社とも電力、用水、ガス、埠頭、棧橋などを挙げている。三菱ケミカルは硫酸、塩酸、硝酸、メタノール、アンモニアなど基礎化学品を提供できることもセールスポイントに挙げている。

京浜臨海部でも、横浜モデルとして遊休地の活用のあり方を各社で色々相談されているという話があったが、これは是非とも市とも協働で実現していただきたい。

最後に質問であるが、旭硝子がユウグレナに用地を賃貸したが、この旭硝子に対して、市は何か支援をしたのか。

(事務局) 支援している。むしろ市が主体的に土地が余っているということで、そういった活用をしないかということでお願いをして、それでコーディネートして、既存の条例の産業立地条例があるので、その支援の枠の中で支援した。

(真野委員) 例えば、企業向けの賃貸ビルを建設した澁澤倉庫 AB には税軽減、助成金交付がなされ、そこに入居した企業にも同様の優遇措置が講じられているが、遊休地を賃貸に出した旭硝子には税軽減や助成金交付はあったのか。

(事務局) 旭硝子にはそういったことはしていない。ユウグレナの進出に対しては助成していない。

(真野委員) 遊休地を賃貸に出す企業に対しても、何か優遇ができれば良いと思う。

(村木委員) 今日の資料を拝見していて、エレメントということなので、7つあるわけだが、これは行政計画なので、これを受けた側でどなたがおやりになるのかというのが必ずあるわけである。それを考えると、何を基軸にしてこの後企業誘致を図られていくのか、土地利用転換を行うのかということがマスタープランにしっかり書かれなくて結果的にバリューアップというところの横軸がなんとなく見えづらいような気がした。そこからすると、この間アメリカに行った時に、企業誘致を考えると、日本の都市づくりで絶対やられないのは、産業クラスターの分析がすごくおざなりにされているとアメリカの方から言われた。何をこの後強みにして、都市を変えていくのかということの分析をもっとしていかななくてはいけなくて、それが多分土地利用と関係してくるのだと思うが、遊休地がどこにあって、産業でどれを伸ばしていくのかということが今日の資料では分かるようでなんとなく分かりにくい。このあたりを1枚の地図にしていくことも大事なのではないかと思った。その際に、もう1つ考えないといけないのは、プライオリティをどれに与えるかということである。今日の説明では全て並列だが、全部を1度にやることはたぶんできなくて、その際のプライオリティを決めていかななくてはいけない。環境エネルギーのところ、先ほどもお話がたくさんありましたが、再エネで考えると、インフラ投資がすごく高いので、それでもやるかという腹くくりの状況というのをしっかり示していく必要があると思うし、賑わいという観点でも、人が入って良いところと人が入らない方が良いところの線引きをしっかりとしていかななくてはいけない。先ほども空間の話があったが、人を呼ぶには、デザインが大事で、例えばデンマークでは、清掃工場も火力発電所も全部デザ

インコンペを行っている。都市に近くて人が見える、そのための価値をどうやって創造するのも合わせて検討していただきたいと思う。

(岩佐委員)

技術と産業構造変化の側面からコメントさせていただけたらと思う。説明資料で、横浜市は製造業の貢献が全国の中でも大きい地域だのご用意いただいた。製造業の集積があることから、特許の出願、もしくは発明者の住所で見た出願数が、日本の中で東京、大阪、名古屋次いで、川崎、横浜の順に多くなっている。今これだけ技術の集積が横浜周辺にあるというのは、これまで製造業活動の集積がずっとここにあった成果だと思う。しかし同時に、横浜における大事な産業であるとして挙げられたいくつかの産業が、技術の変化に伴って、大きく構造が変わっていくことが予想されている。自動車の貢献が大きいという指摘があったが、これから人工知能を取り入れ自動運転車、電気自動車に変化していく中で、自動車の会社だけでなく、例えば、ガソリンスタンドが要らなくなる。整備工場も今までの整備工場と同じ形ではいなくなる。非常に全体が変化していくのが、マスタープランが扱っていくこの10年、20年の期間で予想されている。その中で、今までの維持ももちろん大切だが、全体的にガラッと大きく変えていこうという時には、先ほど堀の中だけで高度化させるのではなくて広くとらえてオープンにしないとダメだという指摘があったように、高度な技術というのは堀の中だけでなく、様々な研究者、民間企業労働者の知恵が循環して繋がっていき中で生まれてくるので、そういったものを闊達にするような大きな政策を打ち出してもらえると良いと思った。例えば、神戸の医療産業都市がある。震災の後に大きな変化をとということで、中にモノレールを1本通して、理研、病院、大学もあり、造船産業をこれから医療機器の生産に変化させていこうという目的で周りにたくさんの医療機器産業を育て、知恵を循環させる体制をつくっているという場所である。こういう形で様々な関連する知識が回るような場所をつくってあげるといっても、こういう遊休地がたくさん出て、大きな変化が求められる時には大事だし、もうちょっと元気なアイデアを出していただけると良いと思った。

(森地委員)

色々な議論が出たが、基本的に行政だから網羅的に手当てしたいという中ではあるが、目玉になるものをいくつか出さなければいけない。それをやった上で、岸井委員からあったように、行政や企業に対して、誘導性を持たなければいけない。何を柱にするかということが一つ。

それから、共通して出てきたのが、ゾーニングの話だが、前回は陸と海の間を3つに分けて、物流中心から住宅やオフィスなどの都市型に変えるところなどやったのだが、今回なんとなく見えているのは、一番横浜駅に近いところが、ちょうど都市型への転換というところだけ見えてきて、それ以外が見えていない。これをどうするか。

それからみなさんからお話があったように、それぞれがすごくロットが大きい、ニーズの方から見ると必要面積は小さい。それをどうやって処理してい

	<p>くのか、あるいは、他の委員からお話があったように、そういう空間を供出してもらったり、共同化したりしていく時に、色々な方法があるはずで、1個でなくても良いと思うので、どういうものを用意するか。</p> <p>それから、みなさんが言われているように、外から見ると廃工場に近い空間をどうするのか、ということが明らかにテーマである。柱かどうかはともかく、横串としては重要な意見である。まだあるはずで、そうやってまだまだたくさん出てきて、その中から、これが今回の計画の一番のポイントで、一番これから重要なことであるということを出してほしい。</p> <p>(池田委員) この間現地に行ったが、緑が非常に少ない。日本鋼管、今の JFE は 1970 年代の初めに常緑広葉樹を植えて、今森になっている。佐土原委員が言われたように、緑というもののマスを、これだけの土地があるのであれば、全部緑というところを作ると、人も集まってくる可能性もないわけではない。エリア、資金の問題はあるが、少し考えたら良いかと思う。</p> <p>(小西委員) 池田委員が言われたのは、扇島を造成した時のことだと思うが、1兆円くらいのお金をかけて埋め立てをし工場を作った。この建設に当たっては、緑地の整備等環境対策に相当配慮したということだった。40年以上の時間が経ち、緑地は森になっている。この京浜臨海部の将来に向けて、何かキャッチフレーズが必要だと思う。先ほど話の出たイノベーションという考えを併せて、「ラストベルトからグリーン&イノベーションベルト」といったキャッチフレーズで再整備をしていったら良いのではないか。</p> <p>(小此木委員) 二村委員が言われたように、私ども非常に危機感を覚えているのが、工場跡地に不動産型物流施設が林立することである。私たちは倉庫を建て、自分たちの力でオペレートしている中で、不動産型物流施設が供給過多になっていく状況に危機感を覚える。それをどういうふうにしていくのか。港に立地しているので、アッセンブリ工場みたいなものを作るのも一つで、行政と民間がそういう企業を誘致していけば、横浜に新たな製造業ができる可能性がある。</p>
	<p>議題2 その他</p> <p>(事務局) 今後のスケジュール等を説明</p>
<p>資 料</p>	<p><説明資料> 京浜臨海部再編整備マスタープラン改定について</p> <p><参考資料> 「第1回横浜市京浜臨海部再編整備マスタープラン改定審議会 会議録」</p>

会議録の内容を確認しました。